



B. Tribe Agrilini ナガタマムシ族

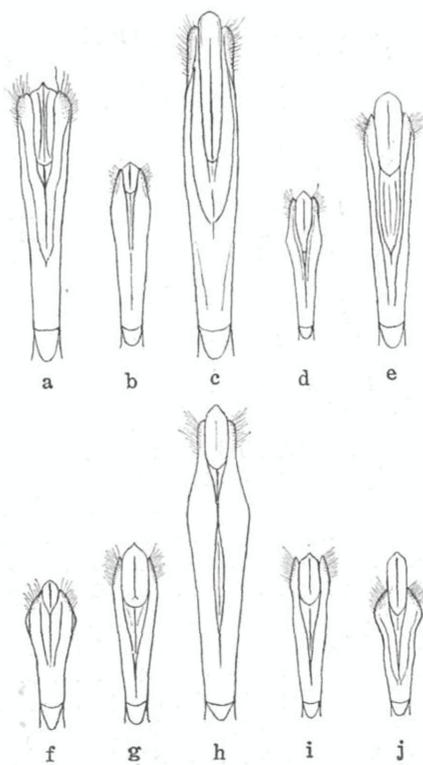
跗節が細長く、とくに後跗節は長い。後跗節の第1節は細長く円筒状で、次の3節を合した長さや等しいか、またはそれより長い。体は細長く、一見して本族のものに判る形をしているが、中には短太で一見ナカボソタマムシ類に似た形をしたものもある。ただ1属を含むだけであるが、極めて種類が多い。

29. Genus *Agrilus* Curtis, 1825 ナガタマムシ属

全世界に約3,500種が記載され、更に続々新種が記載されているので、その数は恐らくは近い将来に5,000に達するであろう。しかし、この属の種類の常として、地方による色彩や形態の変化が激しく、これらの地方型がそれぞれ独立種になっている場合も多く、また変化のない種類でも、A地ではa、B地ではb、C地ではcと、それぞれ異った命名をされている場合も考えられるので、実際数はそれ程多くはないと考えられるが、余りに種類が多く、模式標本が広く分散しているのでその総合的な判断は今となっては下し様がない。せめて一地域の完全な綜説を作製しておく以外に方法がないであろう。

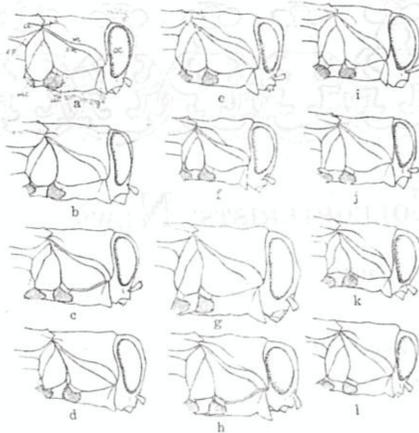
日本には既知種56種を産するが(沖縄、小笠原を含む)、この他にもかなりの数の種名未定の種類があるので、その数は80を超えるであろう。

この属の分類は前記の通り、色彩や形態の変化が激しい上に、酷似した種類が多いので、困難を極めているが、雄の交尾器によるときには比較的楽に種の判定が出来る(第8図)。また、外部形態では、前胸背板の側方にある内側隆線、側隆線、および下側隆線の形、長さ、その相互関係など(第9図)、前胸腹板の葉状部の形、腹部末節端の形、尾節板の縦隆線の有無、翅鞘の肩隆線の有無、その形状、両複眼の位置などは種の判定に重要な役割を演じる。しかし、多くの種類を含むこの属を幾つかの亜属に分割する試みは、一定した共通の特徴を求め難く、外部形態による限り不可能に近い。例えばソ連の学者(Semenov-Tianschansky, Stepanov など)のよ



第8図 ナガタマムシ属の雄交尾器

- a. *Agrilus spinipennis* Lewis ケヤキナガタマムシ
 - b. *A. tempestivus* Lewis ウグイスナガタマムシ
 - c. *A. cyaneoniger* E. Saunders クロナガタマムシ
 - d. *A. tibialis* Lewis ホソアシナガタマムシ
 - e. *A. sinuatus yokoyamai* Iga アカバナナガタマムシ
 - f. *A. suvorovi salicivora* Y. Kurosawa ヤナギナガタマムシ
 - g. *A. fortunatus* Lewis コガネナガタマムシ
 - h. *A. marcopoli ulmi* Y. Kurosawa アオナガタマムシ
 - i. *A. sospes* Lewis シロテンナガタマムシ
 - j. *A. komareki* Obenberger クワナガタマムシ
- (以上全部同一拡大率)



第9図 ナガタムシ属の頭胸部側面

- a. *Agrilus spinipennis* Lewis ケヤキナガタムシ
 oc. 複眼, ph. 内側隆線, m. 側隆線, sm. 下側隆線, ce, 肩隆線 ep. 翅鞘側片, gl. 葉状部, ac. 前基節窩, mc, 中基節窩
 b. *A. alazon* Lewis シラホシナガタムシ
 c. *A. fortunatus* Lewis コガネナガタムシ
 d. *A. sospes* Lewis シロテナガタムシ
 e. *A. discalis* E. Saunders ヒシモンナガタムシ
 f. *A. tempestivus* Lewis ウグイスナガタムシ
 g. *A. cyaneoniger* E. Saunders クロナガタムシ
 h. *A. alesi* sacchari Obenberger アレスミカンナガタムシ
 i. *A. tibialis* Lewis ホソアシナガタムシ
 j. *A. sworovi* salicivora Y. Kurosawa ヤナギナガタムシ
 k. *A. pilosovittatus* E. Saunders シラケナガタムシ
 l. *A. friebi* Obenberger ヴェダクナガタムシ

うに翅端の形で亜属を分けようとする試みもあるが、これはソ連の様な分布の北辺部では種類も少なく、その上熱帯的な顕著な種類がほとんどいない為で、東洋熱帯の種類を見馴れた眼には、その突出の状態は一連の中間種が存在し、翅端の形で分類しようとする試みは全く無意味であることが判るのである。一方、交尾器の形状も図示した様に千差万別で、系統を求めるには余りに変化が多過ぎるが、その中にただ一つ、ヨーロッパから極東にまで分布する *angustulus* 群に属する種類だけは左右不对称の特異な交尾器を持っていて、ある程度他から区別することが出来るが、これとても、不对称の度合が千差万別で、亜属として分離するだけの重要さがない。この群に属する種類は、対馬の *lasiolus* Obenberger と奄美大島の *amamioshimanus* Y. Kurosowa の2種があるが、日本本土には全く産しない。

一世代約1年ないし2年を要するが、余り長い種類はないであろう。幼虫は主として枯死後間もない枝幹、時には幹や小枝の樹皮下を食害する。また生木の形成層部分を食害し、甚しい時には加害樹を枯死させる害虫も少なくない。日本では温州ミカンに加害するミカンナガタムシが有名であるが、朝鮮にはリンゴに害する *A. mali* Matsumura リンゴ

ナガタムシがあり、ヨーロッパにはバラに加害する *A. aurichalceus* Redtenbacher の様な種類もある。後者はバラ苗について北アメリカに輸入され土着している。また、ヨーロッパから中央アジアにかけての乾燥地にはオトギリソウ科やキク科の草本の茎に食いつく種類も多い。日本産の種類のうち、加害植物の判明している種類は少ないが、その中には草本植物を食べるものはない。或は今後草本を食べる種類が発見される可能性がないわけでもない。しかし、裸子植物や禾本科植物に加害する種類はこの属の中に発見されることはないであろう。

成虫の発生期は主として春から夏にかけてで、若葉の上に発見される場合が多いが、新しい枯枝などにもよく飛来する。直射日光を浴び活発に行動するのでなかなか採集に困難する。加害樹中の蛹室中で前年の秋に成虫になっていて、そのまま越冬して、翌春外界に脱出するものが多いが、中にはヒシモンナガタムシやホソアシナガタムシの様に、一度外界に出てから再び樹皮下や石下にもぐり込んで越冬する種類もある。

以下に日本から記録された種類について、アルファベット順に解説することにするが、上記の通り、これが日本産のこの属の全種類ではないことをお断りしておく。

1. *A. acastus* Kerremans, 1912 ツシマナガタムシ 分布：日本（対馬）、台湾。台湾から記載された種類であるが、日本では対馬だけに産し少ない。対馬産は台湾産に較べ、体色が明るく、翅鞘が真銜色を帯び、亜種 *tsushmanus* Y. Kurosawa, 1963 に属する。恐らく中国にも産するであろうが、もしかすると、本種はボルネオから記載され、スマトラ、フィリピン、台湾などから記録のある *A. discicollis* H. Deyrolle, 1864 ツマグロナガタムシのシノニムかも知れない。

2. *A. alazon* Lewis, 1892 シラホシナガタムシ 分布：日本（本州、四国、九州、対馬）、中国、台湾。模式産地は熊本県湯山であるが、稀ながら関東地方でも採れる。本州、四国、九州のものは青緑ないし緑青色であるが、対馬産は青銅色を帯びる。中国産は一樣に銅色で、亜種 *lunlingensis* Obenberger に、台湾産は翅鞘後半が紫青色、細長く、白斑が小さく、亜種 *ajax* Kerremans, 1912 に属する。幼虫はエノキにつく。近似種が2種ある。

3. *A. alesi* Obenberger アレスミカンナガタムシ 分布：日本（九州、種子島、屋久島）、琉球（奄美大島、沖縄本島）、台湾。体長6~10mm、翅鞘には白毛からなる顕著な波状や雲状の斑紋があるが、時に多少黄色を帯びることがある。ごく最近までミカンナガタムシ *A. auriventris* E. Saunders と混同されて来た種類であるが、前胸背の側縁が円味を帯び、内側隆線の湾曲が少なく、前方でやや切断された様になりその先は不明瞭、翅鞘の斑紋は細小、白色でより鮮明（ミカンナガタムシに比較して）などの点で異なる。私が北隆館の日本昆虫図鑑や

原色昆虫大図鑑Ⅱでミカンナガタマムシとして図示したものは共に本種の誤りで、真のミカンナガタマムシはまだ図示されたことがない。九州では両種が混産するが、どちらかと云うと本種は南方に多く、鹿児島産はほとんど本種、北九州産はほとんどミカンナガタマムシであるが、福岡県産の本種や鹿児島産のミカンナガタマムシも検している。大串竜一氏のミカンナガタマムシの報告を見ると、その発生は6月と8月下旬の2回のピークがあると云うが、前者は真のミカンナガタマムシ、後者は本種ではないかと思っている。

原産地は沖縄本島で、全体銅色がかった唐金色を帯びる。奄美大島産は頭胸部だけが唐金色で、翅鞘は黒色でかすかに銅紫色を帯びる。亜種名は *sacchari* Obenberger, 1940 を当てるのがよいと思うが、模式標本は Okinawa, 11. ix. 1919 産の♀であり、原記載にも Okinawa になっている。私の知る限り、沖縄産はすべて原型ばかりで、この型は奄美大島に限られるので、これは奄美を沖縄に含めて Okinawa としたもので、沖縄本島ではないと思う。九州本土や屋久島、種子島のものは、前胸背がやや青緑色を帯びる以外に奄美大島産のものと大差がない。従って、*sacchari* を亜種名に用い、新亜種名を用意する必要はないと思う。台湾産は九州産によく似ているが、まだよく検討していない。中国産の確実な標本は検したことがないが、北ベトナムから記載された *A. tonkineus* Kerremans, 1895 や北インドから記載された *A. ambiguellus* Kerremans, 1903 などは恐らく本種の地方型ではないかと考えられる。

4. *A. amamioshimanus* Y. Kurosawa, 1963 オオシマナガタマムシ 分布：琉球（奄美大島）。体長4mm内外の小形種。唐金色、翅鞘はほとんど全面短毛で覆われる。雄交尾器はわずかではあるが、明らかに不対称。日本本土からは、対馬のヒメクロナガタマムシ *A. lasiolus* Obenberger, 1935 以外に不対称の交尾器を持った種類は知られていない。

5. *A. asahinai* Y. Kurosawa, 1956 アサヒナルリナガタマムシ 分布：樺太 日本（本州）。体長8mm内外。全体青藍色で、体下は黒色を帯びる。樺太白樺産1♂、小沼産1♀に基いて記載した種類で、本州産のツヤナガタマムシ *A. cupes* Lewis, 1892 ヨーロッパの *A. pseudocyanus* Kiesenwttter, 1857 などに似ているが、内側隆線を全く欠き、下側隆線も弱く、前後で側隆線に合しない点で区別できる。本州産は体型が多少異り、前胸背の側縁の膨出が強く、亜種 *pseudorotundicollis* Y. Kurosawa, 1956 と云う。模式標本の産地は京都市芹生であるが、他に岐阜県美濃市須原で採れた1♀を検しただけである。なお、本種はウラジオストクから記載された *A. cockerelli* Fisher, 1925 と同一種であるかも知れない。

6. *A. asiaticus* Kerremans, 1898 オオウグイスナガタマムシ 分布：日本（本州、九州、対馬）、朝鮮、満洲、ウッスリー。体長8mm内外、内側隆線

は強く湾曲し、翅鞘は両側部を除き一様に短い銀灰色毛でおおわれる。5、6月頃に現れ、ナラ、クスギ類の葉上や伐木に来る。西日本の種類で、私の知る限りでは、東限は長野県伊那谷。近畿地方北部から中国地方にかけては各地に産し、九州では北九州と祖母山に産する。四国の産否は不明。対馬には普通。原産地は「満洲」であるが、詳しい産地は不明。私が以前用いた *A. planefasciatus* Obenberger, 1936 は異名。Obenberger はホソアシナガタマムシ *A. tibialis* Lewis, 1892 の大陸亜種 *prinadai* Fisher, 1925 を *asiaticus* と誤り、*asiaticus* に新名を与えていた。日本産は大陸産の原亜種とは前胸背の構造其他で多少異り、亜種 *igai* Y. Kurosawa, 1963 に属する。

7. *A. auriventris* E. Saunders, 1873 ミカンナガタマムシ 分布：日本（本州、九州）、中国。体長6~10mm。上記の通り、アレシミカンナガタマムシと混同されて来たもので、後者に較べて前胸背の幅が広くやや平たく、側縁の膨出は弱く、側隆線の湾曲が強く、先方は中央で強く波曲し、翅鞘の斑紋は暗く、毛色は黄色を帯びる点で区別される。原産地は単に Japan となっているだけであるが、G. Lewis の第1回目の採集品であるから、長崎であることにほぼ間違いない。ミカン類の大害虫で、北九州に多く、本州（奈良県、和歌山県、三重県）にも産するが、四国からは本種もアレシミカンナガタマムシも共にはっきりした記録がない。中国からの記録はアレシミカンナガタマムシと北インドからビルマを経てインドシナ半島にかけて分布する、やはりミカン類の害虫である、ハイイロミカンナガタマムシ *A. grisator* Kerremans, 1893 の3種を混同しているようで、再検討を要する。しかし、私は Obenberger の標本の中に香港産の *auriventris* を検することができた。Obenberger がシンガポールから記録した *auriventris* は、実物を調べたら、*grisator* の誤であった。フィリピンからモルッカ諸島にかけては、よく似ていて短太のミナミミカンナガタマムシ *A. occipitalis* Eschscholtz, 1829 が分布し、サイパン島、オーストラリア、ジャワ、シンガポールなどにも侵入し、ミカン類の大害虫になっている。台湾からも記録されたが、その真否はわからない。また、八重山諸島には近似の別種がいる（未記載）。以上5種は近似した斑紋をしていて、八重山のものを除いた4種が全部ミカン類の大害虫である点は興味深い。

8. *A. auroapicalis* Y. Kurosawa, 1957 ツマキナガタマムシ 分布：琉球（八重山）、台湾、中国。体長6mm内外（原記載に12.0mmとなっているのは誤り）、全体やや赤紫色を帯びた黒色で、翅端は唐金色または金色、翅鞘には白毛からなる雲状斑がある。台湾の Nanjin 山産の標本に基づいて記載したものであるが、八重山諸島産の標本を数頭検した。また、香港産の標本も検したので、中国および北ベトナムから記載された種類に該当するものがないか

と思い調べたが、今の所それらしい種類はない。

9. *A. auropectus* Kerremans, 1912 キンモンナガタマムシ 分布：日本(九州, 種子島, 屋久島), 琉球(奄美, 沖縄, 八重山各諸島), 台湾。体長7~10mm, 翅鞘の斑紋は新鮮なものは黄金色, 古いものは褪色して白っぽくなる。私は佐多岬の標本に基づいて, 原亜種(台湾)に較べて, 明色で斑紋が強く金色である点で, 亜種 *kanohi* Y. Kurosawa, 1954 を区別したが, 本種は明らかに海流によって台湾から琉球の島づたいに分布を北上させた種類で, 日本のものを別亜種として区別する必要はない。台湾には酷似しているが, 内側隆線の彎曲が異なる別種タイワンナガタマムシ *A. formosanus* Kerremans, 1912 がある。この他近似種が数種台湾にいるが, 日本には本種ただ1種だけである。

10. *A. boninensis* Y. Kurosawa, 1963 オガサワラナガタマムシ 分布：小笠原諸島。体長5~9mm 全体銅色またはオリーブ色を帯びた唐金色, 翅鞘は一樣に細かい銀灰色毛でおおわれる。小笠原諸島の特産で, 父島と母島から知られている。ムニンエノキにつくらしい。台湾と琉球にやはりエノキ類につく近似種がいる。

本種は故鹿野忠雄博士が日本生物地理学会の「小笠原諸島生物相」(1930)の中で命名されたものであるが, 残念ながら記載がなく, 私が1963年に鹿野博士のコレクションに基づいて記載した。

台湾産コガネムシ覚書

野村 鎮

1. *Trox chinensis* Boheman オオコブスジコガネ (= *T. obscurus* Waterhouse)
産地：Kenting (18. v. 1973, 益本仁雄氏採集); Horisha (三輪, 1930)。
2. *Trox opacotuberculatus* Motschulsky
ヒメコブスジコガネ
産地：Fenchiihu (25. vi. 1973, 清山好美氏採集); Horisha; Arisan (三輪, 1930)。
共に三輪博士が1930: Ins. Matsum. IV, 4: 171 に記録しておられるが, 益本仁雄・芝田太一両氏の御好意によって確認することが出来たので報告する次第である。尚, 三輪博士が *T. chinensis* とされたものは *T. pauliani* Haaf ではないかと考えられる。また, 台湾産の近似種には *T. opacotuberculatus* Motsch. の他に *T. formosanus* Nomura が産することが判った。台湾の *Trox* にはこれら4種の他に *T. scaber* (Linné) チビコブスジコガネの記録 (Rokkiri; Hokko) がある。
3. *Cyphochilus insulanus* Moser オオシロコガネ
産地：Kosempo (H. Sauter); 不明 (芝田太一氏所蔵)。
本種は♂♀共に白色で大型 (25~30 mm) である。
4. *Cyphochilus crataceus* (Niiijima et Kinoshita) ヌスジロコガネ

Lepidiota cratacea Niiijima et Kinoshita,

1923: 北大演習林研究報告, II (2): 75 (♀)。

Cyphochilus insulanus (nec Moser), Niiijima & Kinoshita, 1927: l.c. IV: 16.

C. insulanus var. *miwai* Nakabayashi, 1939: 関西昆虫学会々報, 8: 139 (♂)。

シロコガネという和名で, ♀が白色, ♂が黄褐色の鱗毛でおおわれたものに, 1927年以来 *C. insulanus* なる学名が使われていたが, この学名のものは前記 (3) に相当する別種である。和名は近藤英夫氏 (1940: 昆虫界 VIII (79): 622) によった。

5. *Papuana philippinica* Arrow オオクロマルコガネ

Arrow, 1937: Trans Ent. Soc. Lond.: 47.

Endrödi, 1969: Ent. Arb. Mus. Frey: 445;

1971: Pacif. Ins. XII (2): 255.

産地：Is. Lanyu (Kōtōsho) (30. v. 1~2. vi. 23 vi. 16~25. vii. 13. viii. 7. x)。

筆者は櫃原寛氏採集の1♂を *Heteronychus punctolineatus* Fairmaire として1970: 昆虫学評論 XXII: 71 に記録したが, その後芝田氏の御好意で多くの標本を検した結果, 上記の種であることが判ったので訂正する。

6. *Pleuronota nigropubescens* Miksic ケブカエグリコガネ Miksic, 1971: Bull. Sci. sect. A, Yugosl. XXI: 208.

産地：Rishan (21~23. vii. 1968, 櫃原寛氏採集); Taiheizan (Type: 9. vii. 1933, 中条道夫氏採集)

筆者は1970: 昆虫学評論 XXII: 71 に *Coilodera sexmaculata* Kraatz として記録したが, Miksic は上記の学名を与えた。(桐朋学園)

○奥秩父のフジコバヤズカミキリ2題

1. 新潟県弥彦山産のコバヤズカミキリがサザンカ生葉を後食したことは既に報告した (甲虫ニュース No. 14) が, フジコバヤズカミキリも生葉を後食したので記しておく。

1972年7月9日, 中臣謙太郎氏が埼玉県三峰山においてフジコバヤズカミキリ1♂を採集, 生かしたまま持ち帰ったところ, 三峰山より採取したサクラの1種の若葉を好んで後食した。さらにサザンカ生葉も与えたところ, やはり好んで後食した。自然状態で生葉をどの程度に後食するかは判らないが, 与えればかなりの種類の生葉を後食するものと思われる。なお, 本種を恵与下さり, 日頃から御世話になっている中臣氏に心から感謝申し上げる。

2. 奥秩父におけるフジコバヤズカミキリの採集場所は, 筆者の知り得る範囲では三峰山・雲取山・柳沢峠・大菩薩など関東側だったが, 長野県側の採集例があるので報告する。

1♂1♀, 16. VI. 1972, 長野県南佐久郡川上村梓山~西沢~甲武信岳, 久保田修採集。本種を恵与下さり, 発表を許された久保田氏に心から御礼申し上げます。(横浜市金沢区, 高桑正敏)

日本産 *Pidonia* 属の覚書 (1)

窪木 幹夫

Pidonia 属 (カミキリムシ科) は全北区の温帯地域に带状に約50種が分布している。1968年から1972年にかけて、大阪城南女子短大教授林 匡夫博士は「*Pidonia* 属の総説的研究」(短大紀要)において、世界的視野のもとに *Pidonia* 属をまとめたが、その中で日本産本属を27種11亜種に整理された。博士は特に四国産種については詳細な調査をなされ、その立体的な分布を明らかにしている。しかしながら東日本や九州についての調査は必ずしも十分とは思わず、これを裏付けるかの様に1971年には新潟県苗場山から *P. hayashii* Koike, 翌1972年には静岡県富士山から *P. fujisana* Obika et Kusama が記載された。

筆者は1968年から全国的範囲で本属に関する分布及び生態的調査を行い、また全国各地の同好者の厚意によって多くの標本を検討する機会を得たのでこれらのデータを逐次本誌上で報告して行きたい。しかしながら本属に含まれる各種の分類学的位置付けに関する意見は研究者によって異なる場合も予想されるので、本覚書では原則として前述の林 (1968, 1969) に従うことにするが、意見の相違がある場合には筆者独自の見解も述べて行きたい。最近ではカミキリムシの採集が極めて盛んで、各地に同好者が増えている。しかし本属の種は個体変異や地方変異が著しく、また色彩、斑紋、形態等が極めて類似しているため明確な同定がされないまま無為に標本が蓄積される傾向がある。この様な事態を解消するためにもこの覚書が同定の際の参考になれば幸甚である。

なお、筆者は本属を従来の平面的分布からばかりでなく、実際に生息している環境を重視し、より緻密な分布及び生態的調査を実施し、その結果を分類の一手段として導入し今後本属の再検討を行いたいと考えている。従って一つ一つの報告は断片的なものではあるが、これを基に最終的には統一のあるものにして行く予定なので標本の同定に関する意見や、分布、生態等の知見があったら御教示願いたい。

○北八ヶ岳の *Pidonia* 属の記録

調査年月日 1972年7月16~17日

調査コース 16日: 稲子湯 (1500m) → ミドリ池 (2050m) → 本沢温泉 (2100m) → 夏沢峠 (2500m).

17日: ミドリ池 → 中山峠 (2430m) → 黒百合平 → 渋ノ湯 (1850m). なお、採集は筆者自身によるものである。

1. *P. testacea* (Matsushita) ニセフタオビノミハナカミキリ, 21♂♂, 7♀♀ (1600-2300m).
2. *P. yokoyamai* Hayashi ヨコヤマヒメハナカミキリ, 1♀ (2150m).

本種は本沢温泉 (標高2000m以上, 17. vii. 1959, H. Yokoyama 採集) の個体をタイプとして1968年に記載された。今回の調査では1♀が採集されたのみで♂が採集されなかった為個体変異の巾がつかめ

ず、この個体が真の *yokoyamai* であるとの断言は出来ない。しかも採集個体は若干黒化している事を除けば、長野、新潟、群馬県境附近の高地から採集される種 (種名未確定) に良く似ており今後の検討が必要である。

なお、本種の採集地点は上記の通りであるが、標高2000m附近は近年等高線に沿って広く伐採が行われ、カラマツ移植による環境の変化が影響して下記 *semiobscura* とともに本種をも採集することが出来なかった。

3. *P. semiobscura* (Pic) ホソガタヒメハナカミキリ, 5♂♂, 2♀♀ (1600-1900m).
4. *P. matsushitai* Ohbayashi マツシタヒメハナカミキリ, 10♂♂, 1♀ (1600-2000m).
5. *P. mutata pallida* Ohbayashi et Hayashi ヒメハナカミキリ, 1♂ (2100m).

本亜種は中部山岳の高地帯に広く分布しているがここでも標高2100m附近から採集された。原記載によれば♂の第1及び第2腹節は黒色であるが、採集された♂は黄褐色であった。しかしこの黒色部は南アルプス高地帯産の多数の *mutata* を検討した結果 (詳細は後日発表したい)、著しい変異があり不安定な形質と思われる。

6. *P. discoidalis* Pic キベリクロヒメハナカミキリ, 1♂, 2♀♀ (1600m).

本種には3亜種が知られ、また近縁の別種である *P. muneaka* (Tamanuki) も3亜種が知られている (林, 1969)。両種は各地域ごとに形態及び斑紋が非常に良く似ており同定しにくいグループである。従って他のグループにおけるより以上の綿密な検討が必要と考えられ、その結果では種段階における新たな整理が必要になる可能性がある。本種の分布地は巨視的にみて西日本では垂直的に、東日本では平面的に違いが認められる。なお1968年林博士は稲子湯から *discoidalis* var. *yatsugataakensis* を記載しているが、これは♂の小髯鬚末端節の先端が鋭く尖っている点で typical ♂とは異なっている。今回採集された♂のそれは丸く、typical ♂と一致しており、また♀の翅鞘の黄褐色紋の巾は広く、前胸は♂♀とも赤褐色を呈するなど伊豆半島や丹沢山に分布する *muneaka amagisana* Hayashi に極めて良く似ている。

7. *P. grallatrix* (Bates) オオヒメハナカミキリ, 3♂♂, 1♀ (1600-1900m).
8. *P. maculithorax* Pic カクムネヒメハナカミキリ, 10♂♂, 4♀♀ (1900-2300m).
9. *P. oyamae* (Oyama) オヤマヒメハナカミキリ, 1♂ (2100m).
10. *P. debilis* (Kraatz) チャイロヒメハナカミキリ, 3♂♂, 1♀ (1900-2300m).

なお、上記10種の採集総個体数は74頭であったが、それらの性比は♂74%、♀26%で、最大の優占種は全体の38%を占めた *testacea* であった。

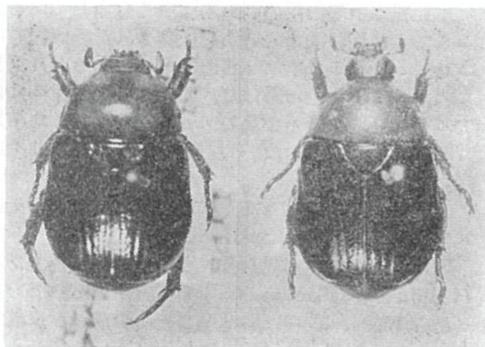
(東京農大)

オオヨツバコガネの雄の記録

野村 鎮・小林裕和

オオヨツバコガネ *Parastasia oberthuri ishigakiana* は、著者の1人野村によって1964年に、先島諸島石垣島よりの1個体の雌に基づきTonkinに産する *P. oberthuri* Ohaus の亜種として記載された。その後、長い間本種が採集されたという報告はなく、雄は依然として未知のままであった。最近筆者等は、石垣島オモト岳の4♂♂、台湾蓮花池の1♂を調査することが出来たので簡単な記載をすることと、雄交尾器をも図示することとした。

なお、標本についてお世話になった、窪木幹夫、益本仁雄、岡島秀治、芝田太一、山口就平の諸氏に厚くお礼申し上げる。



Parastasia oberthuri ishigakiana Nomura
左: 雌 (Holotype), 右: 雄

(雌) 体長: 16mm 体幅: 9mm

頭部: 眼は小さく、幅は両眼間の幅の $\frac{1}{2}$ より狭い。両眼間には、2箇所小さな平滑な部分がある。前胸背: 黒色で、4個の円い赤橙色紋を有する。点刻は細かく、散在し、側縁部では強く密である。中央には点刻を欠く滑らかな縦線を有する。

尾節板: 黒色で、側縁中央付近は大きく凹む。脚: 前脛節は3外歯を有し、第1歯は多少幅広で、先端は鋭く尖らない。中後脚の外側の爪は、二又せず基部でごくわずかに突出する。

(雄) 体長: 15.5~16.0mm 体幅: 8.5mm

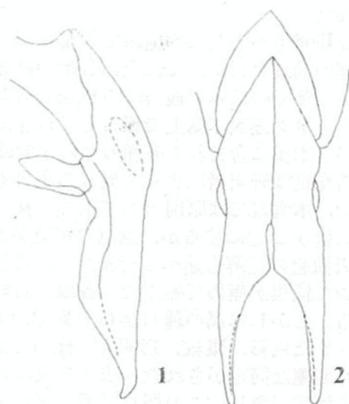
頭部: 眼は大きく、突出し幅は両眼間の幅の $\frac{1}{2}$ より明らかに広い。両眼間には、明瞭な平滑部分がない。前胸背: 橙色で縁は黒色に縁どられ、前縁と後縁の中央付近では、幾分幅広い。点刻は細かく、散在し、前・後縁部においては、いっそう微細となる。

尾節板: 前胸背と同色で、側縁中央付近ではほとんど凹まない。

脚: 前脛節は3外歯を有し、第1歯は幅が狭く、先端は鋭く尖る。中後脚の外側の爪は、大きな三角形をした内歯を有する。

産地: オモト岳、石垣島 (1♀, 15. vii. 1963, 浜裕夫採集 (Holotype), 1♂, 15. vi. 1972, 窪木幹夫採集. 2♂♂, 24. vi. 1972. 岡島秀治採集. 1♂, 20. vi. 1973, 山口就平採集): 蓮花池、台湾 (1♂, 15. vi. 1973, 横山創採集)。

Ohaus は1925年 (Deut. Ent. Zeit. p. 81) に原種の雄交尾器を図示している (Fig. 1, 2) が、この図と比較して、石垣島産のものは、亜種としての取扱いが適当であろうと考えられる。台湾産の1♂については、雄交尾器に多少の差異がみられるものの、その他の外部形態については、詳細に比較検討した結果、明瞭なる区別点が見い出せなかった。その結果、現段階においては、これも石垣島産の *P. oberthuri ishigakiana* と同一の亜種として取り扱うこととした。



雄交尾器—図 1, 2. *Parastasia oberthuri* Ohaus (ex. Ohaus: 1925)

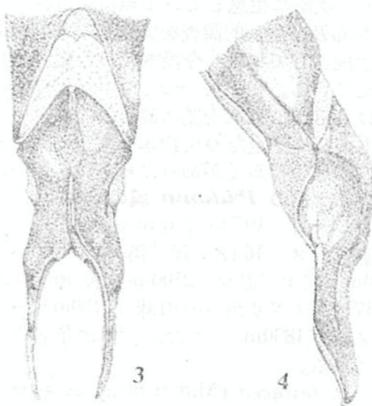


図 3, 4. *P. oberthuri ishigakiana* Nomura (2, 3 は背面図, 1, 4 は側面図)

なお、加藤正世が分類原色日本昆虫図鑑第8巻で図示しているムネアカパラスタジアコガネ (*Parastasia* sp.) も本種の雄個体であろうと思われる。(野村, 国立市: 小林, 東京農大)

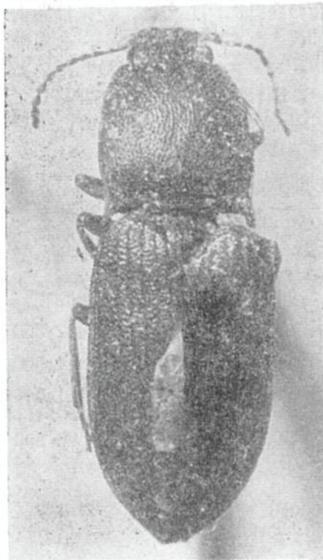
○ヒラタヒサゴメツキ千島に産する

ヒラタヒサゴメツキ *Ascoliocerus (Colioascerus) saxatilis* (Lewis, 1894) は、九州からは高倉 (1959: 北九州の昆虫, 6(1): 3) による英彦山における記録があるのみであるが、本州の中部以北から北海道までは数多くの記録がある。本種は体長の変異があって、小型のは6mmくらいで、大型のは10mmくらいもあるが、近似種とは触角の第1節が扁平状をしていることによって容易に識別できる。幼虫は河原の砂礫中や石下にて、食肉性のようである。

今度、筆者は千島列島のクナシリ島において、1971年6月30日に採集された1雌個体を検することができたので報告する。採集者は不明であるが、この個体は、ソ連の樺太・千島学術調査隊によって採集された標本の一部で、筆者のもとに送られてきたものの中から見出したものである。

なお、この地方にはもう1種別種がいて、それは今度 Gurjeva 博士によって *Hypolithus kurilensis* として命名されたようであるが、筆者はその paratype 標本(雄個体)(第1図)を検したのみで、原記載にはまだ接していない。これは、クナシリ島産で、体長9mm、触角と脚は黒褐色。触角の第1節は円筒状をしている。将来知床半島あたりで採集される

可能性もあるので、参考までにその全形を示しておく。
(愛知教育大学、大平仁夫)



Hypolithus kurilensis
(Paratype)

○ハネカクシの集団死亡例

筆者の一人永井は1970年11月2日に護摩堂山(新潟県西蒲原郡田上村)において、岩の裂け目で死亡しているハネカクシの多数の個体を発見した。それらの死を取り出し検視した結果は、すべてネアカヨツメハネカクシ (*Lesteva plagiata* Sharp) に該当するもので、その個体数を調査したところ120頭であった。従って死亡集団の個体総数は300頭を越えることは確実と考えられる。これらの個体が発見された岩の裂け目は南斜面の比較的水分の多い場所であり、標高100mたらずの地点であった。

本種は通常、河原や溪流際の石の下や落葉下から採集されるが、何故この様な時期及び場所での死亡集団となって発見されたかについての正確な理由は不明である。しかし死亡集団が発見された場所も雨が降れば雨水の流路となる様な場所なので、あるいはその様な環境的要因が関係しているのかもしれない。また集団越冬のために集って来た個体が、何らかの原因によって死亡したとの可能性も否定はできないが、本種が成虫で越冬する証拠が今の所存在せず、4月初旬に採集される個体の多くが未成熟であることを考え併せるとこの様な考えはむしろ否定的である。いずれにしても従来ヨツメハネカクシ亜科に属する種類に関する生態的知見が極めて乏しいのでここに報告し諸賢の参考にする次第である。

(東京農大、渡辺泰明・永井正樹)

○テツイロヒメカミキリの訪花

1973年6月26日の夜0時頃、自宅(東京都品川)の庭のテッポウユリを切りとったところ、開花して居た四箇の花のうち三箇にテツイロヒメカミキリ4頭(2♂♂, 2♀♀)が入っていた。いた処は全てユリの花筒の一番奥であった。本種に花を訪れる性質があるのかと思ひ、その後数夜、百合は切ってしまったので、庭に残っていたインドハマユウの花を見廻したが、一頭も見つけることが出来なかった。又且つて飼育したヒメカミキリが日中、木の髓のうろの中に入り込んで居たことから、百合の花筒の奥のせまい部分を虫がその様に使ったものかとも思ひ、紙の筒(円錐形のもの大、小2つ、円筒形のもの1つ)を糸で木に二箇所ほど吊して見たが、これにも一頭も入ることがなかった。(東京都品川区、木村欣二)

○鳥海山のオサムシ

鳥海ブルーラインが開通し、五合目まで間もなく車が入ると云う近頃、山麓のブナ林は急ピッチで伐採が続く、昆虫も急激に姿を消しつつある。従って、今までに確認出来た同山のオサムシを記録するのも、あながち無意味ではないと思う。なお、クロオサムシとアキタクロナガオサムシはまだ採集出来ない。

種名	採集月日	状態	標高	備考
1. アオカタビロオサムシ	1958.vi.1.	路上	50m	以後見ない
2. クロカタビロオサムシ	1971.viii.14.	ブナの樹幹	760m	少ない
3. エゾカタビロオサムシ	1973.v.27.	路上	50m	少ない
4. セアカオサムシ	1971.v.5.	路肩越冬	360m	以後見ない
5. アオオサムシ			400mまで	普通
6. ホソアカガネオサムシ			200~1000	普通
7. チョウカイヒメクロオサムシ		石下	1600m	少ない
8. ホソヒメクロオサムシ	1971.viii.31	路上	580m	少ない
9. コクロナガオサムシ			50~400m	普通
10. コアオマイマイカブリ			50~400m	普通

(山形県酒田市、桜井俊一)

○マメクワガタを対馬から採集

我国におけるマメクワガタ *Figulus punctatus* Waterhouse の分布地としては、現在まで南九州・屋久島・トカラ中之島が知られており、最近では伊豆御蔵島からも記録されている(藤田, 1972)。

最近筆者は友人、植村好延氏が対馬で採集された1個体を恵与されたので、同氏の御好意にこたえる為下記通り記録する。

1♂, 1972年7月4日, 有明山(対馬, 敵原), 植村好延, 採集, なお, この個体は樹液を舐食中とのことであった。末筆ながら標本を御恵与下さった植村好延氏に深く謝する。(東京農大, 岡島秀治)

○アオオササムの黒化型について

アオオササムシ *Carabus (Okomopterus) insulicola* の色彩変異はいろいろあり、房総半島富山付近では、紫色、黒褐色、黒色などの型が見出されるが、今回、ヤコンオササムシ, *C. (O.) yaconinus* によく表れる、紺色を帯びた黒色の型を発見したので報告する。

1971年8月13日, 長野県鹿教湯温泉において, 8頭中2♂♂のこの顕著な色彩型が採集された(奥村, 多崎, 稲垣採集)。最初は高率で出現すると思われたが, 1973年6月3~11日に採集した約400頭のアオオササムシの中には, 黒化型はわずかに2♂♂, 1♀だけであり, 少ないものである。いずれにしても, アオオササムシの原亜種の中に, 紺色がかかった型が出現しようとは, 夢の様に思えたので感激して報告した。(横浜市中区, 奥村 尚)

会 務 報 告

甲虫談話会が新たな組織のもとに新発足してから既に6年の歳月が流れたこととなります。この間、本会設立の趣旨ののっとり活動が行われて参りましたが、ここでそれらの内容について報告することも、本会の足跡を知る上にも必要なことと思われるので記録にとどめておく次第です。

○談話会：新発足当初は甲虫に関する啓蒙および情報交換を主体とする談話会が隔月に開催され、会員相互の知識の集積が図られました、しかし採集シーズンと談話会開催日との調整や、案内状発送の為の事務的煩雑さ、更には財政的問題等の事情が重なって、必ずしも当初の企画通りには開催出来ませんでした、今後は上述の事情を踏まえた上で、年4回(2, 4, 9, 12の各月)の談話会を企画致して

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本120円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

おります。

○甲虫ニュース：本誌は啓蒙的な解説記事及び速報を目的とした短報を内容としたユニークな情報交換誌としての役割を果たしてきましたが、本誌で18号を数えるまで生長しましたことは、ひとえに会員諸氏の熱意と協力の賜物と思われまふ。内容的には今後もこの姿勢を持続し、確実に年4回の発行を実行して参りたいと存じますので活発な投稿を期待致しております。

○運営事務：時代の流れとともに世話人の身辺上の事情の変化、或は社会的環境の悪条件等が重なって、談話会の開催や甲虫ニュースの発行等に支障を来たし、さらには会の事務処理等にも円滑さを欠いた点があり、多くの会員諸氏に御迷惑をお掛けした事については深く御詫び申し上げます。しかし今後は渡辺泰明(東京農大昆虫学研究室)が一方の事務的窓口となり、従来の科学博物館の窓口とともに他の幹事も一体となって会務の処理に当ることになりましたので、円滑な会運営が行われるはずですので今後とも会員諸氏の協力を御願ひ申し上げます。

○会計報告：本会の会計に関しては、従来世話人会での説明のみで了承されて参りましたが、今後は年毎の収支決算を「ニュース」上で報告致したいと考えておりますので、御諒解いただきたいと存じます。なお、設立当初から今日までの収支決算は下記の通りですので、御了承願ひます。

収支決算報告(昭和48年12月31日現在)

収入の部		支出の部	
会費(127名)	63,500	印刷費 (13~15/16号)	77,500
バックナンバー 売上金	3,000	ニュース郵送費	12,850
寄附金	30,000	例会通知郵便費	4,500
		繰越金	1,650
合 計	96,500	合 計	96,500

甲虫談話会

会費(1カ年)1000円、次号は6月末発行予定、投稿〆切は5月20日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電(364)2311, 振替 東京 60,664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及び第一地帯: 3箇以下 ¥750, 4個以上 ¥650 (以下同様), 第2地帯 ¥850, ¥650, 第3地帯 ¥950, ¥750 其他, 各種器具, 針などを製作販売して参ります。カタログを御請求下さい。

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25
電話 (03) 811-4547